

貞観政要の研究補遺

原 田 種 成

- 一、伝藤原佐理筆貞観政要断簡
- 二、西夏文字貞観要文
- 三、菅家本貞観政要の真本
- 四、三条西実隆自筆本残卷
- 五、十訓抄における貞観政要の引用

筆者は、昭和四十年三月「貞観政要の研究」（吉川弘文館）を公にしたが、古鈔本・古刊本を資料として、貞観政要の成立、伝承の諸様相、古鈔本と刊本との相違等の問題について論述した研究である性質上、その後に新しく発見した資料も少なくない。よってここに補遺としてまとめることにした。

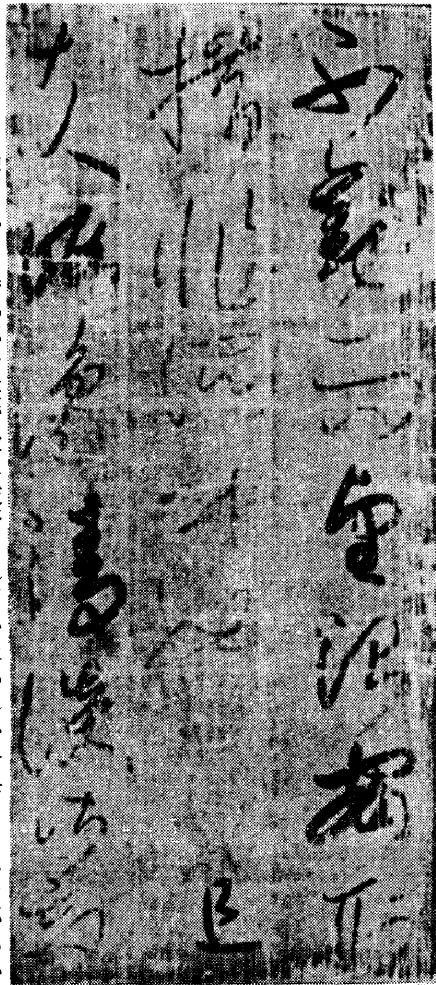
一 伝藤原佐理筆貞観政要断簡

筆者の先の研究においては、日蓮親写本（拙論二六頁）をもって、現存貞観政要中の書写年代が明かな最旧鈔本として掲げたが、それよ

りさらに三〇〇年も遡る藤原佐理筆と伝えられる貞観政要の断簡があることを知った。

小松茂美氏著「平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究」（同書四〇頁）によるに、この断簡が藤原佐理筆として、公開されたのは、大正六年（一九一七）三月『書苑』第七卷第五号に原寸の図版が掲載されたのが最初であろう。当時、横浜の原三溪翁の所蔵で、後、安田善次郎翁に帰し、さらに戦後は菅原寿雄氏の所有となり、常盤山文庫に保管されている。その後の公開は、尚古会編纂に成る『てかがみ』に収録された。いずれも当時から「佐理卿真跡 絹地切」と伝えてきた。前記『書苑』に見える大口周魚翁の解説によれば、これは「白氏文集を書きつらねたる巻物の断片なり」という。その後、昭和二十三年七月『ひくらし帖』が刊行され、その中に、「三 絹地切 伝道風筆（白氏文集）」としてこの一幅の図版が掲げられたとある。

こうして、この三行の本文は「白氏文集」として伝えられて来たのであるが、昭和二十八年の秋、小松氏は「白氏文集」の中にはさぐり



1. 藤原佐理筆貞観政要断簡
原寸 27.8cm×12cm
(常盤山文庫蔵)

得ないことに気づき、当時わが貴族階級に愛好されていたらしい外典を翻転すること多年、足かけ十一年を費して、これが貞観政要巻八、刑法篇第七章中のもの（定本三三頁）であることを発見したのである。それは次の一節中のもので

刑濫則小人道長、賞謬則君子道消、小人之惡不懲、君子之善不勸。而望治安刑措、非所聞也。且夫暇豫清談、皆敦尚於孔老。

この圈点の箇所がその断簡に相当する。（この部分には鈔本と刊本とに文字の異同がない）

僅々三行二十字の断簡、一たび「白氏文集」として伝えられれば、誰一人としてあやしむ者はなく、「白氏文集」を誦んじていないかぎりには、これは「白氏文集」中の語句ではないと断定することは到底不可能である。

しながら小松氏の努力に深い敬意を表するものである。（なお筆者は「貞観政要語彙索引」を作成し、昭和四十一年以来、関東短期大学紀要に登載し、既に「アーシ」までを公にし、四十六年には完成の予定である。）

小松氏のお蔭によって、日蓮親写本を遡ること三〇〇年の、貞観政要の文字が現存することが明かになったことは、筆者にとって、洵に喜びにたえない。そして、これは当時この書が、わが貴族社会に重視されていたと述べた拙論（吾頁）を裏付ける有力な資料を提供するものである。

ただ、日蓮の親写本は、日蓮が貞観政要の全十巻を書物として筆写したものである（日蓮親写本の現存は巻一だけであるが、各巻の残葉の保存されているものがあり、全巻があったことが明かである―拙論

その際、これに疑いを挟み、多くの漢籍をあてもなく渉獵すること多年、遂に「貞観政要」の語句であることをつきとめた小松氏の労は洵に偉としなければならぬ。「白氏文集」でないと断定するまでを考えても、「白氏文集」の語彙索引の類はまだ公刊されていないから、あの大部の「白氏文集」を幾度か翻閲したことであろう。そして、どう調べても「白氏文集」の中には無いことが明かになったとき、目標のない捜査を続けることは実に容易ではなかったことと推測し、今さ

（三頁参照）。しかし、藤原佐理のこれは、いわゆる手かがみとして、貞観政要中の適当な部分を書き抜いたもので鈔本の一部分ではないと推測される。それゆえ、この藤原佐理の断簡は、現存最古の貞観政要の文字を伝える貴重な資料ではあるが、旧鈔本としては、やはり日蓮親写本が最古のものであるといわなければならない。

二 西夏文字貞観要文

昭和三十七年七月、内閣文庫の福井保氏から、貞観政要について研究しているオーストラリア人が来ているから教えてやってほしいという依頼があり、内閣文庫でその人に会った。ウイストン・ルウイス氏といい、香港大学の大学院で唐代史を研究し、目下唐初の政治史について研究中で、貞観政要と取り組んでいるということであった。種々の質問を受けた後、筆者の論文などを与えて研究の便宜を図ってあげた。

その後、ルウイス氏は、三十八年（一九六三）三月に香港大学を卒業、その年の九月シアトルに行き、ワシントン大学に博士号の登録をし、蕭国権教授の下で貞観の治の研究論文をまとめることになったというところで、時折り来信があり、資料その他について問い合わせがあった。

昭和四十二年四月の便りに、ワシントン大学の同僚が目下ソビエト訪問中で、その同僚によって、ソビエト科学アカデミーのアジア民族学会の西夏語に関する研究のロシア語のカタログを見ることができた。そこに「貞観要文」という書が記載され、カタログの編者は、それを

呉兢の著としており、明かに貞観政要の西夏訳であった。わずかに二十九頁の写本の断片ではあるが、そのマイクロフィルムのコピーを入手しようとして努力中であるとのことであった。

なお、そのカタログには「貞観記」、「貞観玉鏡記」の二書の項があるが、これは西夏の貞観時代以降の史書であって、貞観政要とは関係のないものである。しかし、西夏は一一〇二—一一一四まで貞観の年号を用いていたのであり、それは、タングート朝の復興強化の時代で、唐太宗の貞観の治を仰慕した表われにほかならないのであるから、貞観政要を西夏語に訳したものが存在することは、当然のことといえよう。西田竜雄氏の「西夏文字」（昭和四十二年三月、紀伊国屋新書）に「西夏の統治者は、幼少のときからチベット文化に接し、チベット語と仏典に精通していた。それと同時に高い漢文化をも知っていて、漢字・漢語に通じるのみならず、儒学・経学をも研究した。チベット文化と漢文化をもとにして、西夏国に適した独自の文化と独自の制度を作ろうとしたのである。いま残っている翻訳書には『論語』、『孟子』、『孝経』、『孫子』、『六韜』、『貞観政要』などがあり、チベット語と漢語から訳された多くの仏典がある」と記されている（同書四頁）が、それは、この「貞観要文」を指すものに違いない。しかし、西田氏は西夏文字の「貞観要文」そのものは、まだ見ていなかったように見受けられる。

ともあれ、当時、宋の仁宗は貞観政要を読み（玉海）、遼の興宗は貞観政要を訳させ（遼史）、曾肇は宋の神宗に貞観政要を読むことを

勧め（名臣言行録）ており、貞観政要が重視されていたこともまた見逃すことはできない（拙論三頁参照）。

まもなく、六月にレニングラードのアジア民族協会のクチャーノフ教授から送られた西夏文字の「貞観要文」のコピーを送って来た。が、それは、西夏文字をペン字で書き写したもので、そこに漢字をあてて書いてあるが、クチャーノフ氏の手になるもので、西夏時代の貞観要文の原本ではなかった。原本のマイクロフィルムはあとから送って来るという連絡があったということである。

筆者は西夏文字については全く不案内であるが、そこにあてられている漢字を辿ってみると、貞観政要巻四、教誡太子諸王第十一の第二章の終わりの部分と第三章とである（定本二〇頁）。

早速それを京都大学人文科学研究所、平岡武夫教授を介し、西夏語の専門家の西田竜雄助教授に調査していただいた。西田氏の検討の結果によると、ソ聯の訳に疑義のあるところもあるということであるが、この西夏訳は、次に掲げるように意訳にもとづくもので、西夏文を漢字に復原しても、現在の政要とは相当に違ったものとなるということであった。

クチャーノフ氏の訳に西田氏が補訂したものの一部を紹介する。

（貞観政要、巻四、教誡太子諸王第十一、第三章）

〈貞観要文〉

貞観七年中太宗魏徵於言謂先祖帝王
部節相統自治作安全令者甚少皆權

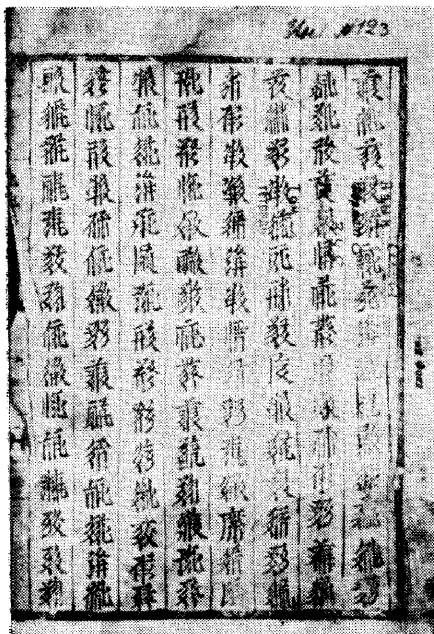
貞観七年太宗謂侍中魏徵曰
自古侯王能自保全者甚少皆

〈貞観政要〉

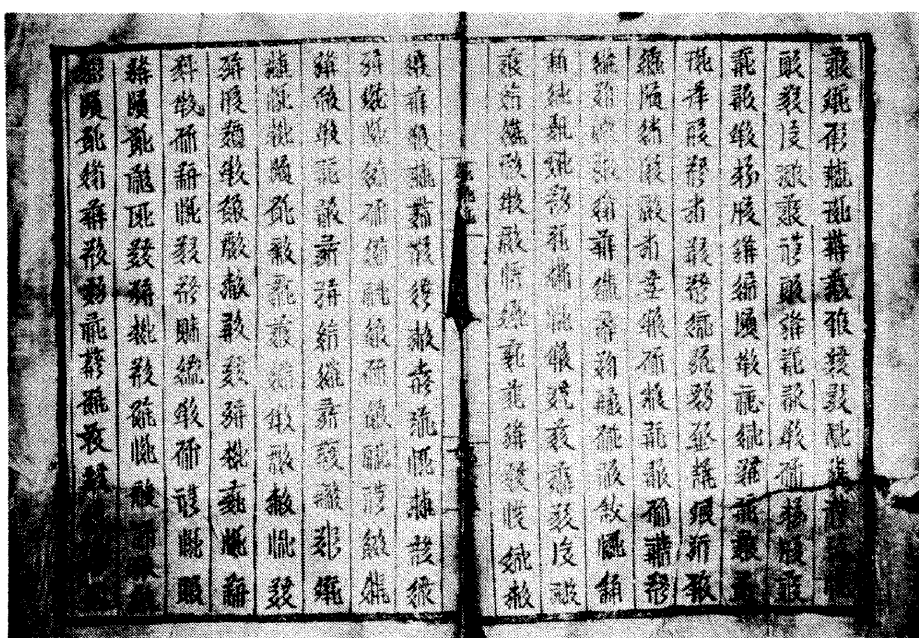
富中生自驕逸向所多君子与近親小人——由生長富貴好尚驕逸多不解遠順不解因故是如也……
親君子遠小人故耳……

一五〇

だから、この西夏訳の底本が、宋版系の刊本であるか、唐鈔本系の鈔本であるかを窺う手がかりは全くない。また、この貞観要文については、漢文の貞観政要とは甚だしく異なるように見受けられるが、それは、西夏において、政要の別種の系列に属するテキストを用いたものと考えられるよりも、西夏人にわかりやすいように政要を西夏語に意訳したものと考えられるべきものであろう。ともあれ、この断片の存在によって、貞観政要が日本・朝鮮のほかにも西夏においても重んじられていたという事実を知ることができたことは、まことに喜ばしいことであ



2. 貞観要文(1)
(ソビエト科学アカデミー蔵)



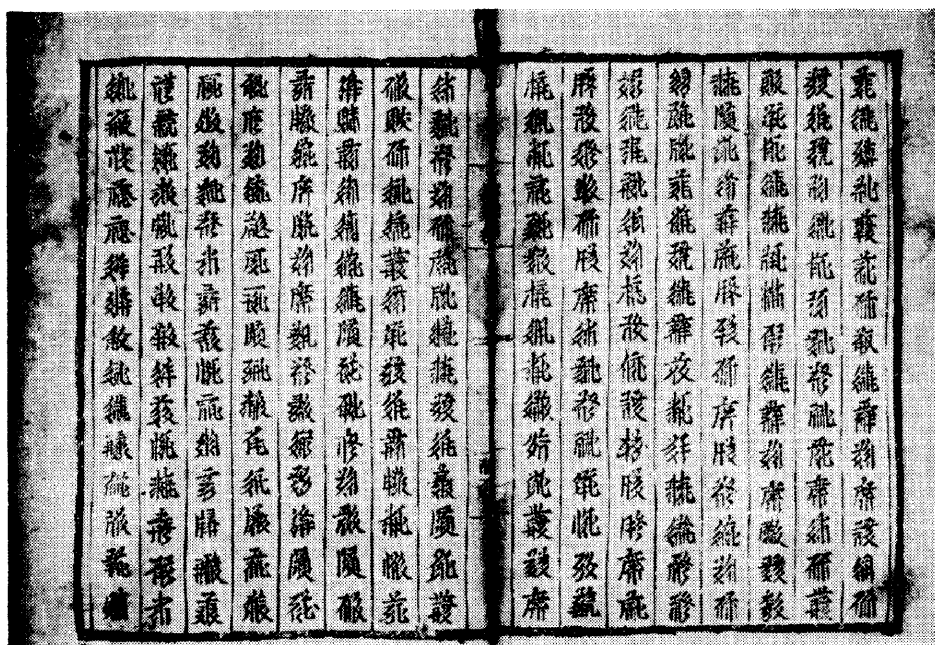
3. 貞觀要文(2)



5. 貞觀要文(4)



4. 貞觀要文(3)



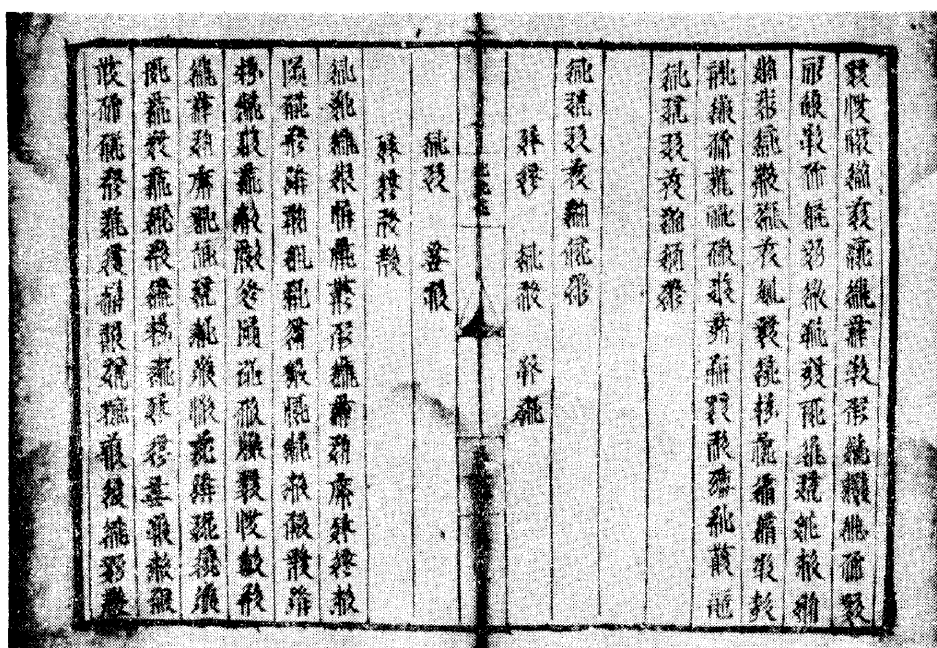
6. 貞觀要文(5)



8. 貞觀要文(7)



7. 貞觀要文(6)



9. 貞觀要文 (8)



10. 貞觀要文 (9)



19. 貞観要文(18)



20. 貞観要文(19)

る。

やがて七月に、フィルムを入手したからとて送って来た。前に掲げたものがそれである。この貴重な資料をわが国で入手したのは筆者だけであるから、ここにその全部を掲載し、専門家の研究に役立てたいものと思う。なお、ルウイス氏は、ワシントン大学を卒え、一九六八年から、オーストラリアのシドニーのマッコーリー大学で東アジア史を担当することになったということである。

三 菅家本貞観政要の真本

本邦に伝存する貞観政要の旧鈔本には、藤原南家本と菅原家本とがあり、南家本については、宮内庁書陵部と穂久邇文庫とに蔵する南家相伝の秘本と称する鎌倉期の鈔本建治本を紹介し（拙論二三頁）、菅家本については、巻九末に、永禄三年五月の菅原長雅の奥書のある内藤湖南博士旧蔵の粘葉本を紹介した（拙論四三頁）。

ただ、そこに疑問を提起しておいたのは、内藤本は菅原長雅の自筆本ではないらしいということであった。

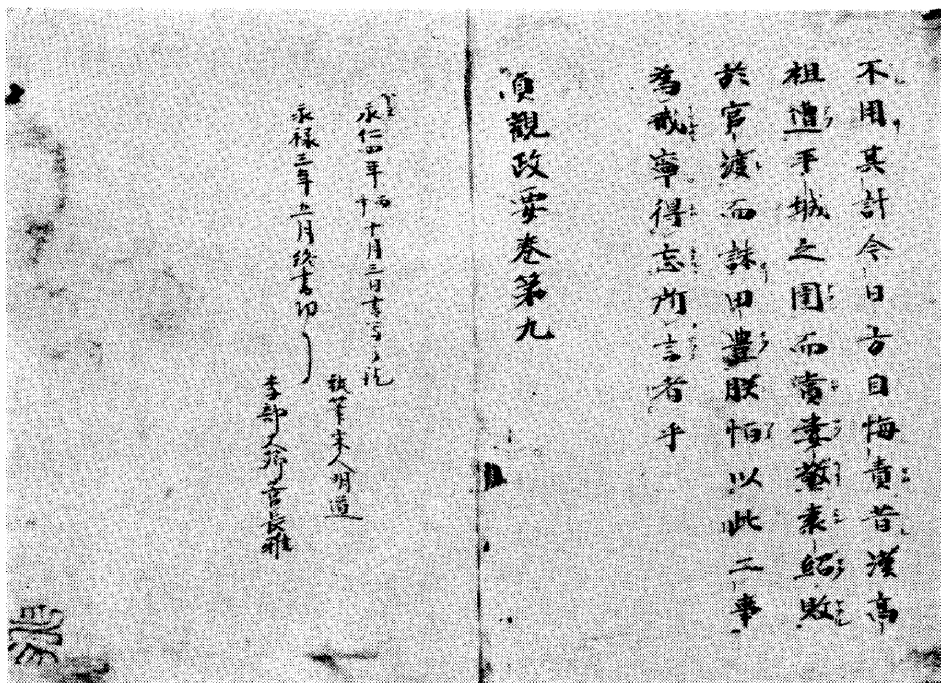
内藤本を見ると、各巻末に花押のような文字を朱筆で模写したものがある。それについて、斯道文庫蔵の松崎憐堂手沢菅家本には、その花押様の下に「錦所藤輔卿以文校本云、永禄本長雅卿朱印如此」と記してある。錦所すなわち山田以文は、長雅手写の永禄本を自身で見て、それが朱印であることを確認してこう記したものであろうか。もしそうだとすれば、内藤本のそれは、朱印ではなくして朱印を模写し

たものであるから、長雅の自筆本ではないということになる。それについて、富岡謙蔵氏は内藤本について記し（芸文第六年第十号「真本貞観政要考」）、「毎巻の末端に、爲の字の篆体、花押の如きものを朱にて書せり、輪郭なけれど爲長の印章なるべし」といつている。富岡謙蔵氏は、その朱記が爲の字に似ているところから、爲長の印章であると考え、内藤本は長雅の自写本で、爲長の印章を模写したものと考へたらしい。

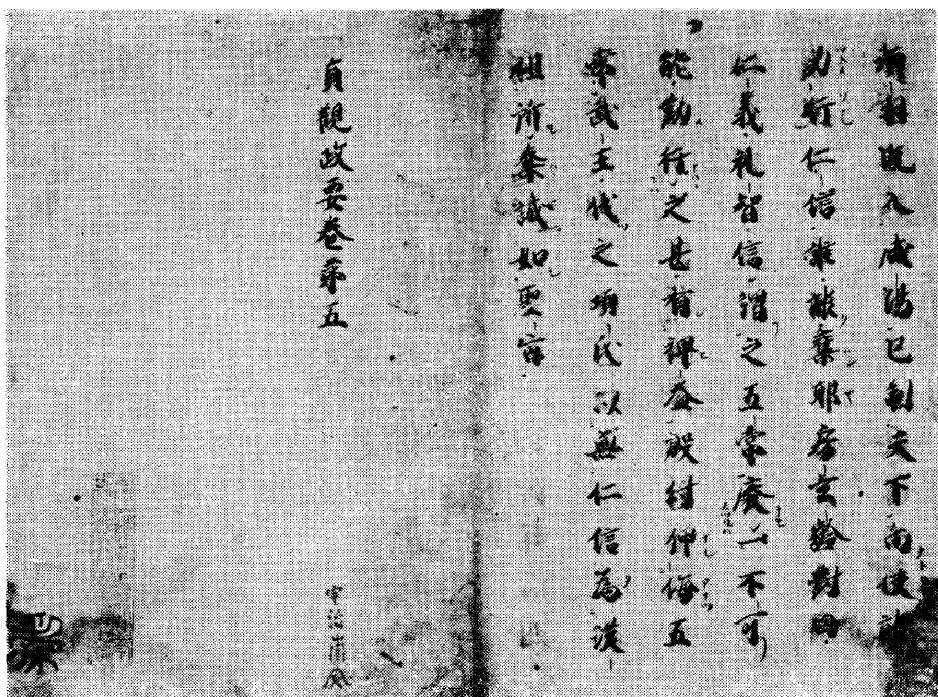
しかし、筆者は、内藤本の巻八にある虫損のための欠字が、虫損そのものではなくして、原本の虫損を模写したものであり、しかもその虫損は、粘葉装の左右両端の上部にできているのである。それゆえ長雅が家伝の巻軸本から手写したとき、巻軸本にあった虫損を模写したものではないことが明かであるから、内藤本は長雅の手写本ではないと断定し、長雅手写本は今日どうなっているか判明しないと記しておいた。

ところが、去る四十一年五月、三都古典連合会の古書展観入札展に出陳された「貞観政要古鈔本四帖（四・五・六・九巻）」を見たところ、それは菅家本で、巻末には明かに朱印が押されている。この本、現在は慶応大学斯道文庫の収めるところとなり、同文庫において仔細に検討を加えることができた。

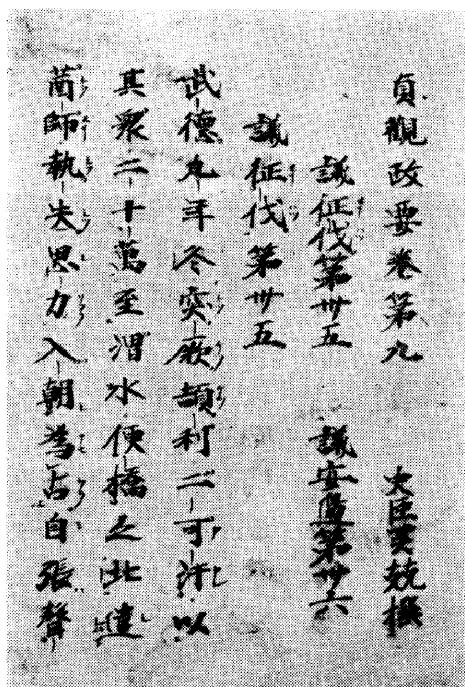
内藤本と比較するに、全くの敷き写しで、両者の間に分毫の差異も認められない。それゆえ、本文の校勘上における問題を提起するものはない。ただ、惜しいことに、四・五・六・九の四巻のみで、拙論で



21. 菅家本巻九末・奥書及朱印（慶応大学斯道文庫蔵）



22. 管家本卷五末 (慶応大学斯道文庫蔵)



24. 管家本卷九首 (同上)



23. 管家本卷六首 (同上)

問題にした卷八の虫損の箇所が、内藤本のように虫損を模写したものであるか、虫損そのものであるか否かを知ることができない。が、巻末の朱印が模写ではなくして、印が捺してあるところよりすれば、これこそ菅原長雅の真本で、内藤本はこの本を敷き写ししたものであることが明かとなった。

なお、内藤本系の菅家本の卷九は、本邦伝来の鈔本の系統のものでなくして、宋刊本によって補われたものであることを拙論（四九頁）において詳述したが、慶応本の卷九をよく見たところ、その巻の筆法が他巻の文字とは著しく違っていることを、いっそう明瞭に知ることができた（挿図22・23の字体と24の字体との相違がそれである）。

これまた、伝来の鈔本とは系統の違う本が混入されているために、筆写の際に原本の筆勢までも忠実にまねたために生じた相違であり、菅家本系統の卷九は、刊本系統のものが竄入していると論証した有力な裏付けともなっている。

四 三条西実隆自筆本残卷

近ごろ、三条西実隆自筆本と称する貞観政要卷二の残卷一軸を手に入れた。一誠堂主人酒井宇吉氏の言によれば、その方面の鑑定家は、実隆の自筆に相違ないと断定しているとのことである。

三条西実隆（四壹―五三）は、文明十六年（四四四）に、後土御門天皇の命を受けて、貞観政要を校合し、長享二年（四八八）には、同じく命を受けて貞観政要の銘を書いたことが、共に「実隆公記」^{（註一）}に見えて



25. 三条西実隆筆卷二（家蔵）

おり、貞観政要との関係が深かったことを知ることができる。

この本、卷二の第二章の途中（定本三頁第三章の四行目）から、第四章の前半（定本四三頁六行目）までの残卷である。一行十七字、朱のヲコト点、墨の訓点がある。

この本、南家本に属するか菅家本に属するか、その校比を試みることにし、その著しい異同を左に掲げる（数字は紀州版の葉数、A Bはその表裏）

〔卷二〕へ戈直本	〔南家本〕	〔菅家本〕	〔三条西本〕
5 B 菅参謀帷幄	常〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
" 太子右庶子	〇〇左〇〇	〇〇左〇〇	〇〇〇〇〇 _左
7 B 為太子洗馬	〇〔隠〕〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
10 A 因泣下久之	〇〔妓〕〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇
10 B 自斯以後	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇〇

右の校比によれば、10 Bの「已」の字の違いを除けば、すべて菅家本に一致する。そればかりか、挿図にも明かなように、魏徴の章の冒頭が、「魏徴鉅庶人也」とあって「鉅庶」を「鉅庶」と誤記し、「庶」の字の傍に「鹿」と墨筆で訂正している。これは、内藤本もまた同様であるから、同系の本であることは疑いないばかりか、永禄三年（五〇）の菅原長雅の筆写に先だつものであり、拙論（三四頁）において紹介した、慶応大学図書館蔵の卷二残卷一軸と共に、内藤本及び菅原正雅自写本の祖本ともいふべき菅家本の一つであると認められる。

注一 実隆公記「文明十六年十月大、三日丁巳晴。貞観政要第三海住山書写之本加校合可進上之由勅定之間。招中山宰相中将校合之」

実隆公記「長享二年六月大、廿四日丙辰霽、自禁裏貞観政要銘可書進上之由被仰下之。則染筆進上」

五 十訓抄における貞観政要の引用

貞観政要が、わが平安・鎌倉・室町時代にかけて、広く朝野の尊崇を受け、愛読されていたことは拙論（三頁）において詳述し、『将門記』・『平家物語』・『平治物語』・『源平盛衰記』・『太平記』の中に貞観政要の文を引き、あるいはその中の話が引用されていることについても紹介した。しかし、それら軍記物語の諸注釈書のすべては、貞観政要を出典として引用するに当たって、元の戈直（二三）が校訂した集論本が、明の成化元年（四六）に校刻され、その本を徳川家康が慶長五年（一六〇）に開版して本邦に流布した系統の通行刊本に拠り、前記の軍記物語が作られた当時に本邦に行なわれていた旧鈔本に拠ることをしなかったために多くの誤りを犯している。

なにゆえ、貞観政要の出典について通行刊本を用いれば誤りになるのか。その要点を略述すれば、『詩経』・『書経』や『論語』・『孟子』あるいは『史記』・『莊子』など、シナの典籍の殆んどすべては、現行の活版本も江戸時代の木版本も、さらに遡って王朝時代の旧鈔本も、また漢土の刊本も、すべて同一系統の本のみで、往々にして一、二字の小異はあっても、甚だしく系統の違う異本・別本というようなものは存在していない。だから、王朝時代の国文・国史の文献に引用されている、それらシナの典籍中の語句を、現行本によって調査し、某書の某篇にあると記しても、全く誤りはない。しかしながら、貞観政要に関しては、室町時代以前の文献には江戸時代以降の刊本を典拠として

用いることができない理由がある（白氏文集については貞観政要ほどではないが、文字の異同が多い）。

それは、貞観政要は、その原著者である呉兢の手によって、唐の中宗に上進した初進本と、玄宗に上進した再進本との二種の本が作られており、その両本における著しい相違は、その巻四が次のように異なっていることである。

〈初進本〉

〈再進本〉

輔弼第九

論太子諸王定分第九

直言諫争第十

論尊師傳第十

興廢第十一

教戒太子諸王第十一

求媚第十二

規諫太子第十二

この相違は、篇名だけのものではなくして、その篇名からも推測できるように、内容においても、共通するものは一章もない。そして、唐代には両系の本が並び行なわれ、本邦にも、奈良時代にはそれが渡来していたのである。それは、本邦に伝存する貞観政要の旧鈔本には、江戸時代以来、識者の間に菅家本及び南家本と称されていた再進本系の鈔本と、筆者が発見して写字台本と名づけた、前人未調査の初進本系でなかった、貞観政要の選述の経緯と、刊本の成立の過程とが、筆者によって初めて明かにされたのである。（拙論四三頁参照）

漢土における書籍は、印刷術が発明されなかった唐末ごろまでは、すべて書写本のみによって行なわれていた。それが、宋代になって多

くの典籍が刊刻されたとき、貞観政要には二種の伝本があるために、一種の伝本だけを刻したのでは完全ではなく、さりとて、一つの本を二種類も刊刻することもならず、再進本を基にして、それに初進本だけにある章を附入して新たに編訂して出版する、ということが行なわれたのである。そのために、現行の刊本には、巻二納諫篇の末に直諫類という附篇が添えられているが、それは、初進本巻四の直言諫争篇や輔弼篇の章を附入するとき、別に篇を設けては、十巻四十篇の数と合わなくなるから附篇としたために生じたもので、呉兢の原著には、四十篇に分類した中に、附篇というようなものはあるべきはずはないのである（通行刊本以前の古刊本には、巻八貢獻篇にも禁末作という附篇があり、刊刻のたびに篇章の移易が行なわれていた）。だから、呉兢の真本に拠った唐鈔本の系統に属する本邦の旧鈔本には、そのような附篇というものが存在しないのは当然である。

そして刊本は、宋版から元版を経て、元末、至順四年（三三）に戈直が校訂して注を加えた本が刊刻された。これが通行刊本の原本である。降って、明の成化元年（四六）に、戈直本が覆刊され、その本が慶長五年（一六〇〇）に、徳川家康によって開版された。これによって、初めてこの戈直本が本邦に流布するようになり、それまでに行なわれていた鈔本は世間から姿を没し、菅家・南家の両本については、江戸時代に一部の校勘家の目に触れることもあったが、写字台本については、全く埋没して、そのような系統を異にする本が存在することすらも知られることがなくなってしまったのであった。

すなわち、現行の通行刊本は、江戸時代になってから初めて広く流布したものであって、鎌倉・室町時代にかけては、菅家・南家の鈔本あるいは写字台本の鈔本によってのみ、貞観政要の講読がなされていたということを知らなければならない。

その点が明になれば、『平家物語』や『源平盛衰記』あるいは『太平記』等に引用されている貞観政要は、旧鈔本をもって典拠としなければ誤りになるということは明白である。ところが、国文の注釈書の多くは、すべてその誤りを犯している（昭和元年三月、関東短期大学紀要第十集「軍記物語と貞観政要」に詳述）。

近ごろ、軍記物語と同じころの書である『十訓抄』の中にも貞観政要の引用があることを発見し、石橋尚賢著「十訓抄詳解」（明治書院）について調査したところ、前記軍記物語の諸注釈と同様の誤りを犯しているものでそれを明かにしたい。

(1) 第二 可_レ離_二橋慢_一事（二七頁）

中にも唐の太宗の御時、魏徴が徳政の三つの品を定め申しける詞に、焚_二鹿台之宝衣_一、毀_二阿房之広殿_一、懼_二危亡於峻宇_一、思_二安処於卑宮_一、則神化潜通、無為而治、徳之上也。とありけるを、貞観政要に書かれぬこそ、儉約の政のあるべきやう、いみじうめでたけれ。

〈詳解〉 貞観政要君道篇に出でたり。

〈考異〉 卷一君道篇第四章（定本二頁）にあり、本文の文字に異同はない。

(2) 第三 不_レ可_レ侮_二人倫_一事（二三頁）

孤兒・寡婦なりともあざむくべからず。

〈詳解〉 貞観政要政体篇に「太宗曰、隋文帝欺_二孤兒寡婦_一、以得_二天下_一」など見えたり。

〈考異〉 卷一政体篇第一章（定本二六頁）にある。

(3) 同 前（二六頁）

「桀・紂は天子たりしかども、顔・閔がいやしき身におとれり」といへるも、賢愚をくらぶるたとへなり。

〈詳解〉 貞観政要鑑誡篇に「太宗曰、朕又聞、桀紂帝王也、以_二匹夫比_レ之_一、則以為_レ辱、顔閔匹夫也、以_二帝王比_レ之_一、則以為_レ榮」とあるによれり。

〈考異〉 卷三君臣鑑戒篇第一章（定本六頁）にある。

(4) 第五 可_レ撰_二朋友_一事（二三頁）

唐の太宗のころがけたまへる女を、小臣契れる旨ありとて、魏徴いさめ申しければ、めさずして止み給ひける、御情には似たまはざりけり。

〈詳解〉 貞観政要直諫篇に見えたり。

〈考異〉 貞観政要には直諫篇という篇はなく、納諫篇に直諫附というものがある。しかし、これは通行刊本だけにあるもので、十訓抄が作られた鎌倉時代に行なわれていた旧鈔本には直諫附というものはなく、しかも、普通に行われていた菅家・南家の旧鈔本には、この直諫附に収められている章に相当するものは

全く収められておらず、ただ、筆者の発見にかかる別系統の鈔本で、筆者が初進本と断定した写字台本の輔弼篇第三章（定本三三頁）にある。そして、それは、菅原為長が北条政子のために和訳した仮名貞観政要の中にあるものであり、十訓抄の作者を菅原為長であるとする説の有力な証拠の一つともなり得るものである（日蓮親写本の残葉及び軍記物語中の引用、明文抄等にも写字台本中のものがあるから、為長だけに結びつくとは言えない）。つまり、鎌倉期に成立した十訓抄に引かれている貞観政要中の説話の出典を、江戸時代に流布した貞観政要の通行刊本に求めることは重大な誤りなのである。

(5) 第六 可_レ存_三忠信廉直_一事（三三頁）

箕子が、紂の心の修まらざる事を知りながら、伴りたはれてやつことなり、何曾が、晉の政のおごれるを諫めずして、家に帰ってしりうごとしける、これ等は、身のためをかまえ、諂へるはからひにて、報国の臣にあらず。

〈詳解〉 何曾が晉の政のおごれるを云々。貞観政要君道篇にあり。

〈考異〉 卷一君道篇第四章（定本二二頁）にある。

(6) 同 前（三七頁）

これは紂の心おごれるによりて、国これをそむく間、天授け人ふるの時なれば、後害の限りにあらざるなり。

〈詳解〉 貞観政要君道篇に「魏徵曰、帝王之起、必承_三衰乱_一、覆_三

彼昏狡、百姓棄推、四海歸_レ命、天授人_レ与、乃不_レ為_レ難」と出でたり。

〈考異〉 君道篇第三章（定本九頁）にある。

(7) 唐に衛の懿公と申しける王は、心つたなくおはしまして、賢き臣下などをば賞し給はで、只鶴をのみ愛して、行幸の折は、同じ輿に乗せなどし給ひけるに、えびすの来りて、国を亡ぼす時、「鶴、君の仇をば退くべし」といひて、防_レぐ人なかりければ、えびす、懿公を殺してみな食ひて、その肝ばかりを土の上にのこして帰りにければ、懿公の臣、弘演といへる人、大いに恥ぢて、己が腹をさきて、君の肝を入れて死にけり。「主辱あるときは臣死す」とぞ世の人はいひける。

〈詳解〉 貞観政要忠義篇にあり。

〈考異〉 卷五忠義篇第十章（定本一四四頁）にある。

(8) 第十 可_三庶_三幾才能芸業_一事（四三頁）

忽ちに天災をやらぐ事、唐の貞観のみかどの蝗をのめりし政にもおとらざりけり。

〈詳解〉 貞観政要務農篇にあり。

〈考異〉 卷八務農篇第二章（定本二四二頁）にある。

(9) 同 前（五〇頁）

又唐の太宗、隋の世を取りて、政を定め給ひける時、魏徵・房玄齡等、勅問に預りて、守文・草創の二つを分きて、文武のすゝみ退ける事をぞ、おのおの心のひく方に付けて諍ひ申しける。

〈詳解頭注〉 守文、貞觀政要によれば守成の誤なり。

〈考異〉 卷一君道篇第三章（定本九頁）にある。頭注が守文を守成の誤りとしたのは、通行刊本が守成に作っているからである。しかし、本邦の旧鈔本である、南家本・菅家本及び日蓮親写本には守文に作っており、（初進本すなわち写字台本は、卷一・二を欠いているが、初進本を和訳した菅原為長の「仮名貞觀政要」にも守文に作っているから、写字台本もまた守文に作っていたものに相違ない）守文に作るものこそ、貞觀政要が宋元人の手によって変竄されない正しい本文を伝えているものである。それを、十訓抄成立当時に行なわれていた本邦伝来の旧鈔本の文字を斥け、宋元人の手によって改められ、江戸時代に流布した通行刊本に拠って、十訓抄の本文を誤りとするのは、許すことのできない重大な過誤である。

(10) 同 前（三六頁）

又太宗は、貞觀三年に、始めて孔子の廟堂を立て、周公旦と孔子とを先聖として、顔回を先師とせり。これ文を重くし給へる故なり。

〈詳解〉 太宗は云々孔子の廟堂をたてて云々、貞觀政要崇儒学篇に出でたり。本文に、貞觀三年とあるは、二年の誤ならん。

〈考異〉 卷七崇儒学篇第二章（定本三三頁）にある。本文の三年は、本邦の各鈔本に三年に作っているものではなく、旧唐書も二年となっているから、詳解の指摘しているように二年の誤りで

あろう。

以上、考異の中で指摘したように、国文の注釈書が貞觀政要を出典として引用する場合に、本邦伝来の旧鈔本と通行刊本とは本文や篇章が著しく相違している事実を知らないために、このように鎌倉期に成立した書の本文の文字を、江戸時代の刊本によって改悪しようとする重大な過誤が生じているから注意する必要がある。

貞觀政要の旧鈔本は容易に見ることはできないが、筆者が旧鈔本を底本として校訂し、呉兢の真本への復原を試みた『貞觀政要定本（昭和三十七年五月、無窮会東洋文化研究所紀要第三輯）』があるから、それを利用すれば、こうした過誤を避けることができる。

（本学教授・文博・漢学）